

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24617008

研究課題名(和文) 放蕩息子 の寓話と北ヨーロッパ商業都市の変容 中世から近世へ

研究課題名(英文) The parable of the Prodigal Son and transformation of the commercial cities in North Europe

研究代表者

前野 みち子 (Maeno, Michiko)

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：40157152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は途中で研究方法を大きく変更し、十三世紀から俄に注目された 放蕩息子の寓話に関する文学・図像研究に社会経済史的視点を導入した。この変更のために論文としての成果は極めて乏しいが、得られた知見は大きく、今後この方向での研究の展開に意欲を持っている。成果は以下の通り。1) この時代の 放蕩息子の寓話への注目の背景には富裕農民層の出現という社会現象が存在した。2) 聖界と都市民はこの現象にそれぞれ異なる立場から関心を寄せた。3) 十三世紀の文学・図像における貨幣・交換表象の頻出、都市民の登場、農民への注目と牽制は、それまで徐々に揺らぎつつあった封建的経済体制の構造転換を映し出すものである。

研究成果の概要(英文)：This research plan was drastically changed on the way, because the original methodology proved ineffective to get meaningful outcome. After the viewpoint of economic history was introduced, the research subject, i.e. why the special interest in the parable of the Prodigal Son suddenly broke at the beginning of the 13th century in north France, was reasonably elucidated. In the term of this research, only a few papers were able to be written as much time was spent in order to find the right way of thinking about this remarkable phenomenon, but I am sure, the gained knowledge is significant and useful to advance my research further in this way.

The main achieved results are: There were some emergent rich farmers in this period.; Clerics and citizens were interested in this phenomenon from different standpoint.; The images full of coins and changeable things in the literature and art in this period reflect such real commercial world.

研究分野：北ヨーロッパ文化史

キーワード：放蕩息子の寓話 北ヨーロッパ 十三世紀 農民像 都市文化 キリスト教モラル 貨幣表象 交換表象

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで北ヨーロッパの中世末から近世にかけての民衆文化(世俗歌や諺や風俗画)及び古典文学の中世への影響とその民衆文化への流入などを研究する中で、恋愛と奢侈とキリスト教モラルの関係に注目するようになった。

(2) (1)の問題関心の文脈で、十三世紀に俄に注目されるようになった放蕩息子 の寓話が、当時の商業都市の興隆とどのように関わり、それがどのような経路を辿って近世の新教劇や風俗画のテーマとなるに至ったのかに興味を湧いたことが、研究開始の背景である。

2. 研究の目的

(1) 当初は放蕩息子 を扱った図像や文学の分析を中心に、文化史・社会史としてこの問題を通史的に概観・記述し、時代の推移によるこの寓話への意味づけの変容を丹念に跡づけ、それ自体が中世盛期から近世にかけての心性史かつ一種の風俗史ともなることを目的とした。

(2) しかし、ある程度まで資料を収集したところで、放蕩息子 のモチーフがなぜ十三世紀初頭に俄に注目されるようになったのかという原点の問題を問い始めた時、単なる心性史・風俗史としてモチーフを時間軸に沿って繋いでいくような研究は大して意味が無いことを自覚した。この自覚は、この原点の現象が持っていたインパクトと比較して、その後のこのモチーフの使われ方が装飾化・表層化し、あるいは神秘化・晦渋化していったことを確認することによってますます強まった。十六世紀初頭に新教的勢力がこの寓話を用いたのは、その神学的意味が自己の教義に資することを見て取ったからであり、新教的教義が生まれた社会背景もこれまでのキリスト教批判という分かりやすい構図を示している。しかし、十三世紀初頭のこの寓話への注目と、そこに見られる、単にキリスト教教義では解釈しきれない問題、当時の社会背景と関連するようと思われる問題が解明されない限り、この寓話の十四世紀以降の継承過程を追うことは無益だと判断した。そこで、研究の対象時期を十二世紀末から十三世紀末あたりまでに変更し、この原点の問題の解明を研究目的の中心に据えた。

3. 研究の方法

(1) 当初は文化・社会史をめざしていたので、関連する素材の網羅的収集とその都度の背景調査、時間軸に沿った変容過程、中世キリスト教道德との関連、商業都市と奢侈文化との関連などを念頭に、文学・美術史関係の先行研究を参照して分析・記述する方法を予定していたが、その過程で、問題の深層を探るためには社会経済史の知識が不可欠である

ことに気づいた。そして、この知識を吸収するなかで、キリスト教モラルそのものが中世の社会経済史的背景と不可分の関係にあることを認識した。

(2) 従って、問題を設定し直して以降は、放蕩息子 の寓話が持つ農村・都市関係のモチーフを社会経済史的観点(流通・市場・貨幣史を含む)から読み解く方法を取り、この寓話に着目した当時の聖界領主(司教や高位聖職者)の意図を探った。

4. 研究成果

(1) 十三世紀初頭のシャルトルに始まり、その後ブルジュなど多くの大聖堂のステンドグラスに描かれた放蕩息子 の寓話については、これまで美術史の分野で数多くの先行研究があり、そこでは、神からの離叛と回帰という神学的意味表現と物語構成との関連、図像の様式や配置と当時の工法や技術との関連など、様々な方面から詳細な分析がなされてきた。しかし、この寓話がなぜこの時期に俄に注目を集めるようになったのか、そしてその注目の在り様はいかに図像に現れているのかを問う研究はほとんど見当たらない。また、これまで美術史の枠内で行われてきた研究成果については、図像解釈の前提とされる制作時の歴史状況に関する認識が近年の史学の成果を十分に踏まえていないという指摘もある。筆者はこのような研究状況を念頭に、同時代の聖職者がなぜこの時期にこの寓話に着目し、そこにどんな意図を込めたのかという問題を、とりわけ以下の二点に注目し、関連する様々の図像や同時代の文学とも比較対照しつつ、社会経済史的観点を導入して分析した。その二点とは、1. 物語冒頭の財産分与の場面に描かれた富裕農民・貨幣・貴金属器、2. 伝統的農民像を体現する兄(牛による象徴)と「宮廷風」を模倣し成り上がりを目ざす弟(馬と鷹による象徴)の対比的描き方、である。その結果、これらの図像がかなりの誇張をもって描かれた理由は、当時の農村で貨幣をため込んだ富裕農民が出現していたこと、聖界(ここでの当事者は司教・大司教)は常に貪欲の罪を説きつつ富裕者から財産の寄進を期待し促したこと、富裕化した農民の中には、とりわけ手近な服飾などで貴族身分や宮廷風を模倣する者が存在したこと、聖界領主は一般に貴族出自であり、当時の階級意識からも、かつて自身の隷属民(十二世紀には次第に自由民化し、それが一部農民の富裕化の基礎を築いたのだが)であった農民のこのような傾向に反感を抱いたであろうこと、などがあると結論づけた。また、この寓話のステンドグラスに顕著な、巨大なスペースを割いた放蕩場面についても、これまでは、息子の帰還後に父が催す祝宴との対照を際立たせるために描かれた俗界の虚飾の宴、淫欲の大罪の図像化と解釈されてきたが、筆者はこれを

認めた上で、そこに重ねられた当時の聖界の都市批判の意図をも推測している。それは、十二世紀末から多くの都市で次第に表面化していく聖界と都市民との経済的利権を巡る対立・抗争の構図から窺えるものである。つまり、ネガティブな都市像はすでに聖書のあちこちに顕著であり、放蕩息子の寓話にもその一端が現れているのだが、ステンドグラスでは寓話の示唆するものを大きく超え出て、都市は、冒頭で示された豊かな貨幣と貴金属器が娼婦たちと賭け事に消費・蕩尽される巨大な貨幣収奪機構として表象されている。これらの図像はやはり、当時の司教座都市の現実をかなり誇張するかたちで描いており、ここにも、聖界 - 俗界の対照を際立たせるための悪徳の都市像の具現化、という観念的な分析だけでは済まされない、当時の社会経済史的背景と密接に関わる図像構想の意図があったように思われる。なお、以上の研究成果については、現在論文にまとめているところである。

(2) 十三世紀前半(1230年頃)に成立したとされる放蕩息子の寓話を扱う俗語劇『アラスのクルトワ』については、これまでも中世文学研究者から様々なアプローチがなされてきた。また美術史の側からこの時代のステンドグラスに描かれた放蕩息子像に言及する際にも、この劇の存在に言及することがすでに一般化している。しかし、単に両者の関連を示唆し、あるいは表層的な比較を試みるだけでは、この俗語劇が持っている、当時のアラスという都市を背景とした特殊性が明らかにはならない。ここでも、社会経済史的視点の導入によって、十二世紀末から急成長を遂げ、毛織物業で名を挙げた都市アラスと近郊農村との関係が、劇中の登場人物たちの世界に色濃く投影されていることが明らかになった。アラスの都市的繁栄は、その中核を成したサン＝ヴァースト修道院が十二世紀後半に近郊農村在住の商人たちを都市へ誘致したことが起点を成しており、十三世紀始めにはすでに、都市ブルジョワが農村を勢力下に収めて農地経営を進める状況が生まれていた。したがって、この世俗劇の背景にある都市 - 農村関係はステンドグラスが制作された司教座都市とはかなり異なった様相を呈している。また、劇の作者はアラスのブルジョワが組織していた文学集団と関わるジョングルールであったと推定されており、この劇も都市民の娯楽に供するものであった。したがって、同じ寓話を扱っているとはいえ、それが伝えるメッセージは大きく隔たっている。ここには十三・四世紀のファブリオによく見られるような、都市民に嘲弄される農民像が顕著に現れているが、主人公は単に粗野で武骨で単純な農民として笑われるのではなく、小額貨幣の沢山詰まった財布を持ち、その貨幣がなしうるあらゆる可

能性、宮廷風の贅沢までもを妄想して都市へやってくる世間知らずの農民の息子クルトワ、とりわけ金勘定のできない主人公が嘲笑の対象になっている。この劇を楽しんだ都市民の多くはアラスの毛織物業を支えた職人や労働者たちであり、彼らの給金は雇い主の商人から貨幣で支払われていた。ブルジョワ層もまた当然ながら貨幣によって生きる人々だった。彼ら都市民は皆、終日金勘定に明け暮れ、金勘定に長けた人々である。十三世紀初頭からアラスで作られた劇の多くが、この放蕩息子劇を含めて、居酒屋を舞台としていることはよく知られている。そこで、劇中でその居酒屋の果たす機能に注目し、この俗語劇の先行作品であるJ・ポデルの神秘劇『聖ニコラ劇』をも含めて分析した結果、居酒屋での出来事がすべて細かい金勘定をめぐって展開されていることが明らかになった。つまり、居酒屋は単なる悪所であるというよりも、アラスという商業都市の縮図だったのである。そもそもラテン語の居酒屋(タベルナ)のルーツを辿ってみるなら、それは商人たちが集まり行き来する酒場を兼ねた旅籠であり、両替と情報交換の場であり、娯楽の提供場所であり、娼婦たちが出入りする場所でもあったから、居酒屋はすべての商業都市の縮図であったとも言える。アラスに移し換えられた放蕩息子劇は本来のキリスト教モラルを周辺に追いやり、居酒屋での場面が全体の三分の二に達するウエイトを占めるに至っている。つまり、小金を持って町へやってきたクルトワが居酒屋で娼婦たちにうまく騙され、財布ごと巻き上げられるという筋書きにも、都市アラスと近郊農村の社会経済史的関係、農村を経済的に圧迫し搾り取りつつある都市の構造が透けて見えるのである。この成果については、論文「中世文学の中の居酒屋と放蕩息子 クリシェか現実か」にある程度までまとめているが、現時点で更に新たな知見が加わっているので、いずれ改稿が必要である。

(3) 十二世紀後半からの貨幣経済の進展は、聖界そのものの墮落と修道院改革運動を生んだが、シュトラースブルク近郊の女子修道院長としてこの改革運動に関わったヘラト・フォン・ランツベルクの残した修道尼のための教育書『歓喜の庭』(1192年頃成立)には、旧約・新約聖書からの挿絵付き抜粋、プルデンティウス『プシコマキア』の挿絵付き再話などと共に、当時の聖界の墮落の諸相を描いた説明文付きの大判の挿絵(美德の階段)が含まれている。そこには聖界に属する様々な聖職者たちが私物にこだわる貪欲の罪を犯し、あるいは淫欲(ルクスリア)の罪を犯す聖職者の姿も見える。本書には他にも貪欲と慈善を対照させた説明文付き挿絵などが存在し、ヘラトが聖界に蔓延していた貪欲に厳しい批判の目を向けていたことが分かる。そしてこの貪欲の象

徴として、これらの挿絵には容器に盛られた貨幣の山、手一杯に握られた貨幣などの図がいくつか登場し、聖界に蓄積され私物化された貨幣の実態を窺わせている。聖界領主が世俗領主に先んじて物納貢租を金納貢租あるいは金納地代に切り換え始めたのはすでに九世紀のことだから、聖界に貨幣が蓄積されたのもこの頃からであろう。しかし全体の趨勢として、貨幣が慈善を旨とするのではなく、貪欲、つまり私物化の傾向を明白に示し始めたのは、いくつかの状況証拠から、貨幣流通が本格的に進展し始めたヘラトの時代、十二世紀後半からだったように思われる。他方、シャルトル大聖堂のステンドグラスには、(1)で触れた富裕農民の貨幣(財産)に向けられた聖界の関心のみならず、他にも、山積みの貨幣や両替商の仕事ぶりを描いたパネルがいくつか存在し、聖界と貨幣との緊密な関係を露呈している。そして上述したように、商業都市アラスの繁栄を基礎付けたのも同地の大修道院であった。自身が貨幣鑄造権を握っていた場合も多い聖界及び聖界領主の活発な商業活動は、社会経済史の研究者には周知のことだが、文学や美術史などの分野の研究者にはいまだその知識が共有されていない場合が多い。その意味で、十二世紀末から十三世紀後半までの貨幣・交換・流通をめぐる画期的な新現象が表象世界に当然及ぼしたはずの影響を踏まえてこの分野の研究を行うならば、まだまだ大きな成果をもたらすはずである。筆者の研究はまだ端緒に就いたばかりであるが、今後も継続して進めていきたい。『歓喜の庭』の快樂と貪欲像については、当時要衝の地であった司教座都市シュトラースブルクとの関連も念頭において、2014年の論文にまとめたが、その後得られた知見は大きく、見直しが必要である。北フランスとドイツ西部とは同じ司教座都市といっても形成基盤が異なるところがかなりあるので、この両者の違いを念頭に置きつつ、社会経済史的視点を十分に組み込んだ改稿を考えている。

(4) 十三世紀後半(1280年前後)にバイエルン地方で成立したと見られる叙事詩『ヘルムブレヒト』は、世俗領主のマイアー(下級荘園管理人の非自由民)の息子ヘルムブレヒトが騎士に成り上がろうとして没落する物語である。この物語の主人公については、かつてこれをドイツ版放蕩息子として位置づけようとした研究者もあり、この説は退けられているものの、放蕩息子の寓話と重なって見える部分が確かに存在する。ヘルムブレヒトは騎士になることを目指して母親と姉に必要な装備を整えさせ、父親には馬を購わせて当時の略奪騎士の仲間に入る。そして、自分の出自集団である農民たちに強盗狼藉を働いた挙げ句に一網打尽となり、死刑は免れるが、父親からも拒絶されて、彼に憎しみをもつ農民たちによって私刑に処される。この物

語では放蕩息子の寓話が持つ父の家への回帰という大団円が全く用意されておらず、彼の罪は貨幣の蕩尽や淫欲などとは比較にならないほど重い。先行研究は非常に多く、さまざまな観点から行われているが、その中には当時のラント法や農民関係の諸規定からこの息子の行為と物語の展開を詳しく分析したものもある。しかし、ここにも当時の社会経済史的視点を導入してみるならば、作品の舞台設定が極めて不自然であることに気づく。この物語の前半では、息子が騎士になるための必需品を両親や姉に整えさせる様子が細々と語られるのだが、それらは馬を除いてすべて、交換によって手に入れられている。農民の自家生産物あるいは家畜、手持ちの物との交換、あるいは自家生産の布や自家での仕立てなどを事細かに述べる語り手は、貨幣について一言も触れない。バイエルン地方の社会経済史研究が証しているところでは、十三世紀も終わりに近づいた時代には、非自由民の農民も貨幣貢納や貨幣地代が一般的で、代々マイアーを引き継いできた父親の下級管理人としての役割は、もはや現物生産品の取り纏めではなく、貨幣の取り纏めであった。すでに農村の周辺には市の開催される町がいくつもあり、貨幣の流通は日常化していた。とすれば、この物語は、登場人物たちを意図的に過去の農民像へと押し込めていることになる。先行研究では、この物語作者が、成り上がりを欲する農民に天罰を加えることにより、中世的階級構造の維持を神の意思に適った理想状態として描いたと見るものがかなりあり、筆者もこれを肯定しているが、物語世界のリアリティを保証するはずの農村的細部が実はそのリアリティを隠蔽するために用いられているという語りの巧緻は、この作者に早くから認められてきた詩文構成上の巧緻と相まって、この物語の際立った人為性を浮き彫りにする。更に、馬を欲しがめる農民を旧態依然の農民であらしめるために何度か効果的に使われている牛への言及は、それ自体、この物語の聞き手(貴族層)におもねる比喩であり、この馬と牛を比喩とする階級間の壁の描き方は、十三世紀初頭から登場した放蕩息子の寓話の新解釈の一要素に直接繋がるものと筆者は考えている。作者の巧みな物語展開の中で、牛は単なる農民性の象徴ではなく、そこから脱して馬を求めようとする農民に、否応なしに自身の農民性を認めさせる重要な役割を果たしていると言える。作者はさらに、父親が購う馬についても、自分の階級に留まるべきだと説得して止まない彼に、貴族の騎馬とは異なる市場での価値の変動性をあげつらわせている。この物語で、市の存在を窺わせる詩行はここだけだが、その市は、信用のできない不当な交換の場として否定的なイメージを伴っている。以上に示した諸点において、筆者はここでも社会経済史的視座の有効性を主張しうると考えている。こ

の作品についても現在論文を執筆中である。

(5) 十二世紀末から十三世紀末までの文学・図像現象や関連の資料を収集・分析する過程で、この間において繰り返し説かれた淫欲（ルクスリア）の描かれ方が、十三世紀に入って俄に具体化してくることに気づいた。中世の娼館がいつ頃から市壁の内側に設置されるようになったのかという問題も、やはり商業の興隆と大きく関わっていると考えられる。また、十二世紀の大聖堂レリーフでは極めて醜悪な姿で描かれるのを常としたルクスリアが、十三世紀の大聖堂ステンドグラスでは宮廷風を装い着飾った娼婦によって代表・表象されるという大きな変化の背景についても、以上に示したような研究方法を用いて解析することが可能であろう。その際には、九世紀以降から残されている『プシコマキア』写本挿絵のルクスリア像との比較対照も必要である。

(6) 研究当初に予定していた中世北ヨーロッパ商業都市の奢侈文化の諸様相を探るために収集した資料を通観する中で、十三世紀以降の女性の服飾についても興味を持った。とくに注目に値するのは、すでにシャルトルのステンドグラスに描かれた多くの女性たちの頭に載せられた王冠のような被り物（バーベット）の流行の広がりである。十四世紀末のハイデルベルク写本では、物乞い女の頭にまでこの被り物が描かれているが、十二世紀末には貴族階層のものであったことが知られる。図像が必ずしも現実を描写しているわけではないが、このような都市の流行の広がり最初の例がこの被り物であったことは既に指摘されている。筆者はその流行現象や普及過程について、やはり社会経済史的観点から、より深い分析が可能ではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1件)

前野みち子「快楽と貪欲 『歡喜の庭』の細密画から読む中世都市社会」名古屋大学大学院国際言語文化研究科 言語文化論集 第35巻 第2号、2014年 pp.13-38.

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

伊藤信博、小峯和明、高橋亨、前野みち子他、勉誠出版、『酔いの文化史（仮題）』（アジア遊学）2018年、分担執筆論題「中世文学にのなかの居酒屋と放蕩息子 クリシェかg園実か」、頁数未定。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前野 みち子 (Maeno Michiko)
名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：40157152

(2) 研究分担者

(0)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(0)

研究者番号：

(4) 研究協力者

(0)